

長楽館の建築について

石川 祐一

1 はじめに

長楽館は、明治の煙草王と呼ばれた実業家・村井吉兵衛（1864～1926）の京都別邸として明治42年（1909）に建築された建物である。村井吉兵衛は京都市東山の煙草商・村井弥兵衛の次男として生まれ、後に叔父、初代吉兵衛の養子となり、吉兵衛を名乗った。明治23年（1890）に「村井兄弟商会」を設立した（明治27年に合名会社化）。アメリカから技師を招くなどし、明治24年（1891）に日本初の両切り紙巻煙草「サンライス」を販売した。その後も「ヒーロー」を販売して大成功をおさめた。明治37年（1904）、煙草事業が政府の専売事業となった後、村井銀行を設立するなど実業家として多方面で活躍している¹⁾。

既に一定の調査²⁾が行われ、設計者、施工者が判明し、殊に内部装飾において質の高い邸宅建築として評価がなされている。こうした成果に基づいて、昭和61年（1986）6月に京都市指定有形文化財に指定された。

これまで既往の考察の資料としては、現存遺構と上棟時の棟札、竣工時に作成されたと考えられる写真帳「京都圓山長楽館 村井別邸」（以下、「竣工アルバム」と呼ぶ）が主なものであった。今回、村井家のご子孫の所有する資料群から、後述するように

大正期と考えられる平面図など重要な資料（本稿では「内海家資料」と呼ぶ）を確認することができた³⁾。加えて、建物の補足調査を行った結果、改修時の棟札など新たな知見を得た。

本稿では追補の知見を報告し、加えて、長楽館の文化財的価値について再考察を試みることを目的とする。なお、以下では、原則として大正期の平面図（便宜的に「大正期平面図」と呼ぶ）に記載された室名称を用い、必要に応じて当初の名称等を併記することとする。

2 建造物の概要

■構造及び外観（写真1～3）

構造は煉瓦造、地上3階地下1階建、天然スレート葺である。遺構から、1階側廻りは煉瓦3枚半積、2階及び3階は2枚半積と判断される²⁾。小屋組には、木造キングポストトラスを用いている（写真4）。

外壁は1階部分に花崗岩を貼る。2～3階は黄色の化粧煉瓦（写真5）を使用し、コーナー部分のみ花崗岩貼りとする。この煉瓦は、村井自身の言から、愛知県西浦町（現常滑市）の煉瓦製造業・久田吉之助によるものと確認されている⁴⁾。久田による黄色の煉瓦は、京都府立図書館や名和昆虫館（岐阜市）に使用されている。また、フ

ランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルに使用するスダレ煉瓦の当時の発注先でもあったことが知られている。

東側に正面入口を配し、イオニア式オーダーを用いた玄関ポーチを配する。南面の西寄り部分、北面の東西両側には1階から3階までボウ・ウィンドウを設ける。外観は、全体としてアメリカで見られたルネサンス風の意匠であるが、様式建築を採用し



写真1



写真2



写真3

ながらも黄色煉瓦を用いた点にはモダンデザインの影響が感じられる。

■平面

1、2階では、東西方向に配された広間がホールの機能を果たし、その周囲に室を配する構成をとる。1階では、東側に設けられた玄関を入ると、玄関脇に応接室を置く。奥に進むと中心に広間がとられ、広間の北側面には、東寄りに客間、中央の一段下がった部分に球戯室、西寄りに書斎が配される。南側面は中央に花卉室（温室）、西寄りに食堂を配する。広間北側に階段が設けられ、2階へと上がる途中北側の中2階に相当する部分の室が支那室（喫煙室）となる。2階広間の周囲には寝室など5室が配されている。1、2階の各室は部屋毎に異なる様式を採用する。



写真4



写真5

3階は東西両側に上がっていく階段を中心にして置き、和室空間が設けられている。階段登り口北側に茶室を配する。東側には上段を備えた書院と次の間、南側に和室2室、西側にも和室が配される。

地階は主に西側部分に空間が設けられている。1階からは広間と、食堂北側の配膳室脇からの2か所の階段で降りる。厨房などサービス機能の空間が配されている。

■各室の床レベルと天井高

長楽館には各階において、床レベルに違いが見られる。その概要を示したのが図1であり、加えて各室の天井高を表1に示す。1階では、球戯室が広間などの他室に比べて約1,000mm、花卉室（温室）は約400mm低くなっている。地階平面を見ると客間を含む東寄り部分や球戯室下部には室が設けられていない。このため球戯室の床レベルを大幅に下げることが出来る。それに応じて、上部に当たる2階支那室（喫煙室）、3階茶室でも同階の広間部分よりも床高が大幅に低くなり、中2階、中3階のような空間構成をとっている。

天井高について見ると、床レベルを下げたことで、花卉室の天井高が最も高くなっている。植物の栽培を目的とするための考慮であろう。広間、客間、食堂はほぼ同じ高さである一方、書斎は約500mm天井高が低い。書斎に比べて食堂や客間の天井高が高いことは、接客空間としての重要性を示している。

2階では、大幅に床レベルを下げている支那室（喫煙室）を除くと、北寝室（旧美術室）の床レベルが広間等よりも400mm

程度低くなっている。これは下部に当たる1階書斎の天井高を低くしたことによって生じたものである。さらにこの床レベルの低さにより、北寝室の天井高は、西寝室、東夫人室、東寝室、南寝室よりもやや高くなる。これは後述するように、北寝室は当初、美術室として用いられたことによるものと推測される。また、2階広間は夫人室や北寝室を除く他の寝室よりも約300mm天井高が低い。

3階は、1階球戯室、2階支那室の階高の影響から茶室が大幅に床レベルが低い。

表1 各室の天井高

	室名	天井高 (mm)
1階	広間	4,025
	客間	4,031
	食堂	4,037
	書斎	3,519
	球戯室	2,843
	応接室	3,841
	花卉室（温室）	4,589
2階	広間	3,343
	夫人室	3,614
	東寝室	3,596
	南寝室	3,624
	支那室（喫煙室）	3,451
	北寝室	3,847
	西寝室	3,623
3階	階段室	2,657
	茶室	2,735
	東側・上段の間	3,283
	東側・次の間	3,296
	東側・和室	2,725
	中央・中座敷	2,623
	中央・次の間	2,623
	西側・座敷	2,208
	旧女中部屋	2,213
地階	南北廊下	2,716
	厨房	2,381
	貯蔵室	2,561
	執事室	2,714



図1 長楽館の各室の床レベルについて

この他の3階空間は床レベルと天井高の相違によって、大きく3つのエリアに分けられる。床レベルは中央部分（中座敷・次の間）が最も低く、その両側の東側部分（上段の間・次の間等）、西側部分（座敷・次の間）が400mm程度高くなり、段差が生じる。中央部分の床レベルは2階広間の天井高が低いことに起因している。

この結果、中央部分（中座敷等）では天井高を高くすることが出来、西側部分（座敷）の天井高は約400mm低くなる。一方、東側部分（上段の間等）は西側部分よりも大幅（約1000mm）に天井高が高くなっている。これは次節で触れるように大正期の改修によって屋根高を上げたために可能となったものである。

■外構・庭園

（門・塀）

敷地の東側面には、円山公園に面して表門（写真6）が設けられている。表門の中央門柱2本の構造は不詳で、表面に花崗岩が貼られ、上部に擬石による装飾が載っている。両脇には各1本ずつ脇門柱が建ち、両側には1スパンの袖塀が残る。2本の脇門柱や袖塀には釉薬を用いた淡黄色のタイルが貼られている。竣工アルバム中の写真



写真6

（写真7）と比較すると、門柱や袖塀部分はほぼ改変が見られない。なお、鉄製部分である門扉や塀上柵は、戦後の製作と思われるものに替えられている。

敷地北側面には北門（写真8）が残り、2本の門柱と南側に袖塀が1スパンずつ残っている。門柱、塀とも表面に表門と同様の淡黄色タイルが貼られている。内部が露出した部分からは、塀が煉瓦造であると確認される。

なお、敷地南側面には塀が周るが、表門などに使用されたものとは異なる黒色のタイルが貼られている。村井邸の時期に遡るものか否かは不明である。

（庭園）

庭園に関しては竣工アルバムや撮影時期の異なる写真資料の他、青焼き配置図が残り、長楽館（主屋）の西側に洋風の庭園が



写真7



写真8

造営されていたことが確認できる。同配置図（図2）には大正期平面図と同様に「荒木建築事務所」の記載があり、同時期に作成されたものと考えられる。

竣工アルバム中の写真（写真9～10）には長楽館（主屋部分）の西側に高欄を設けたテラスが廻り、西洋風の四阿が建てられている。配置図から、長楽館の北西隅から敷地北縁、西縁部分が高くテラスとなり、長楽館の北西部や、庭園の西縁に設けられた階段から、池のある一段低い部分へと降りる構成である。敷地南側の門から入ると、池のある低い面とが同一レベルとなっているようである。竣工アルバムよりも撮影時期が下るもの村井邸であった時に撮影されたとされる庭園写真（写真11）が残る。同写真では庭園北側から西側のテラス檜の側面に、煉瓦が用いられていることが確認される。

竣工アルバム（写真10）では、池の中央に銅製あるいは鋳物製と推測される3羽の

鶴が確認できる。一方、前述の年代不詳の古写真（写真11）では、胴部に装飾の付いた壺が写り、竣工時以降に置き代わっていることが分かる。資料がなく詳細は不明で



写真9



写真10



図2 大正期配置図

あるが、大正期にこうした改変がなされた可能性が高いと考えられる。

昭和40年（1965）に新館（ホテル棟）を建設するのに伴い、庭園部分は取り壊されている。しかし、今回の調査により、長楽館の敷地内に古写真に写る庭園の構成部材が一部現存していることが判明した。

池の噴水部分に写っている壺が裏庭に移動されて現存している（写真12）。銅製の胴部の4か所には龍口の装飾が施されており、古写真（写真11）に写るものと同一であると判断される。同写真では壺から水が噴出する様子が分かるが、現存する壺から、龍口部分が噴水口になっていたことが確認された。

また、長楽館敷地内で庭園テラスの高欄部分と推測される2種類のテラコッタ製部材（写真13）が発見された。竣工アルバムなどの古写真との比較から、庭園のテラス部分の高欄（長さ約600mm）、高欄上に載る植木鉢（直径約240mm）に該当することが分かる。長楽館1階の北西部分の外壁には、庭園へと降りる階段の接続部分が痕跡として残っている（写真14）。同部分には高欄の形状が残り、今回発見された陶製品と形状が一致することが確認できる。

3 建築及び改修の経緯

本章では、長楽館の建設の過程とその後の主な改修履歴について、記したい。

■計画から竣工時

村井は、明治31年（1898）5月に円山公園に隣接する敷地約624坪を購入している⁵⁾。別邸の建築が具体化し始めるのは



写真11



写真12



写真13



写真14

明治37年（1904）頃とされ、翌38年11月になってようやく着工した。棟札によれば明治40年（1907）6月9日に上棟した⁶⁾。夏目漱石の日記によれば、明治40年に京都に訪れた際に、3月29日に「村井兄弟の西洋館建築中」と記しており、施工中であったことが確認される⁷⁾。

棟札（写真及び銘文は、千木良礼子「長楽館の室内意匠と家具について」（京都市文化財保護課研究紀要第7号、2024年3月）を参照のこと）には、監督技師・ガーディナー、ガーディナー事務所主任・荒木賢治、現場係・上林敬吉の名が記されている。アメリカ人建築家、J.M. ガーディナーは、明治13年（1880）にアメリカ聖公会から派遣されて来日したミッション建築家である。初代学長に赴任した立教大学校（現立教大学）校舎群の他、聖アグネス教会、日光教会などの日本聖公会の教会を手掛けている。明治36年（1903）にガーディナー建築事務所を設立し、住宅や大使館の建築へも設計対象を広げた⁸⁾。

施工については、請負人・清水満之助の名が記されており、清水組京都出張所が請け負ったことが清水建設所蔵資料⁹⁾からも確認される。建設に際しての設計資料は確認されていない。建築当初の資料としては既出の竣工アルバムが残されている。記録によれば村井は明治43年に竣工の挨拶状¹⁰⁾を各所に送っているが、アルバムはこの際に作成したものと推測される。

内装は、東京・杉田商店、京都・河瀬商店が手掛けたことが確認されている¹¹⁾。

■大正3年時における改修

既往調査¹²⁾により、大正3年（1914）に3階座敷を改修していることが報告されている。『建築工藝叢書 第二期十四』（大正4年8月）によれば、「外部」の設計をガーディナー、「内部」の設計を大島溢株が担当し、「桃山徳川両時代折衷の十畳、十二畳の二室、其の他廊下、階段等頗る善美を尽」した内装を意図したと記される¹³⁾。清水組の工事経歴書では、大正3年1月10日～3年12月31日の工期で改修が行われたことが確認される¹⁴⁾。

大島溢株は、近世から続く建仁寺流の棟梁の家系に生まれ、高橋是清邸などを設計するなど、伝統建築の重鎮とも呼べる人物であった¹⁵⁾。村井が和室空間を増築するに際して、著名な設計者の手を求めたことが推測される。

また、今回の補足調査により、書院部分が配される東側部分の小屋裏において棟札（前掲、千木良論文参照）を発見することができた。棟札の銘文によれば、「長楽館参階

日本間増築」として、技師・大島溢株、請負人・清水満之助、大工棟梁・新井金次郎が参画したことが分かる。裏面を確認することが出来ず上棟年代の記載は未確認である。なお、「外部」設計のガーディナーの関与は不詳である。

外観の古写真を検討すると、同改修によって外観が変更されていることが確認できる。竣工写真帖の外観写真（写真7）と撮影年代の下がる古写真（写真15）を比較すると、当初は寄棟造屋根の妻面が見えているが、その後の写真では正面（東側）部分が平入形式の屋根になっている。3階部

分の階高が高くなり、窓が増設されるなど開口部が増えていることも分かる。

現状の小屋組には、屋根の改修時のものと考えられる痕跡を確認することができる（写真16）。先章で述べたように3階東側の2室（上段の間・次の間）は、他の和室に比べて格段に天井高が高い。「桃山徳川両時代折衷」の豪壮な書院造の空間を実現するためには高い天井高が必要であり、このため屋根高自体を嵩上げする大規模な改修が必要になったものと考えられる。

大正3年時の改修には、大正御大典（大正4年）に備えて、豪壮な書院造の室を増築することで迎賓を目的とした和室空間の充実を図る目的があったものと推測される。『大正大禮京都府記事 庶務之部上』によれば、大正2年に賓客の滞在施設確保のための視察が行われた。同2年12月に最



写真15



写真16

終的な現地確認の上、「村井別邸長楽館」がイギリス、ドイツの各大使及び使節の宿泊に割り当てが決まった。その後、大正3年8月には第一次大戦で日本がドイツに宣戦布告したため変更があり、最終的にはロシア、イタリアの大天使滞在施設に変更となる。

このため実際には、ロシア特派大使・ニコラス・マレウスキー・マレウイッチ、イタリア特派大使グイッチョリ夫妻らの賓客が長楽館に宿泊している¹⁶⁾。

■大正御大典以降～大正11年頃の主な改修 (喫煙室から支那室へ)

撮影時期の異なる古写真の比較から、2階支那室の内装が変更されていることが確認できる。後述するように、大正平面図（大正11年頃）では当初の室名である喫煙室から支那室へと変更がなされている。大正6年（1917）頃撮影の古写真には、天井に龍の画が描かれ、壁面にも雷文や水墨画風の絵が見られる。竣工アルバムでは、龍の天井画や壁面の水墨画風の絵画は写っていない（前掲千木良論文参照）。

また、昭和11年に刊行された長尾健吉の回想では「支那特色的紫檀細工の家具装飾を用いて支那室を作りたいと云うことで（中略）第二応接間を改装すること」になったことが記されている。このため「支那特色的龍に鳳凰」を用いた天井画を描いたという。同回想録では大正7年に改装したと記されている¹⁷⁾。さらに古写真から大正9年までに照明を洋風から中国風の照明に変更したものと推測される。

支那室（喫煙室）には竣工時から中国風

の要素が用いられていたものの、以上のように大正6年～9年頃の時期に、より中国風意匠が濃厚になったことが確認される。

(エレベーターの設置)

今回調査することが出来た内海家資料には、いくつかの青焼き図面等が残されている。同資料群には既に触れた平面図（「村井家京都別邸平面図」〈縮尺百分の1〉）1枚が残る。同図には「荒木建築事務所」記載が見られる。

松波秀子氏の既往研究¹⁸⁾を参照すると、荒木建築事務所は、ガーディナー事務所に所属した荒木賢治が開設したものと確認できる。松波氏によれば、荒木賢治は明治30年代後半から大正中頃までガーディナー事務所のスタッフを勤め、長楽館（村井吉兵衛京都別邸）、内田定植邸（明治43年／重要文化財）、小田良治札幌別邸（大正2年）を担当している。前述した竣工時の棟札にも荒木の名が見える。荒木の開設した建築

事務所は、荒木工務所（大正11年）から荒木建築事務所に改称するなど細かい名称変更が繰り返されたとされる。

この他、エレベータ設置改修に関する4枚の青焼き図面が残る。

「第壹號 村井氏京都別邸電動昇降機室改造平面図」（図3）

「第貳號 京都別邸エレベーター切斷詳細図」

「第參號 村井氏京都別邸 昇降機室改造詳細図」（図4）

「第四號 村井氏京都別邸 昇降機塔及固屋組改造詳細図」（図5）

と題され、いずれも平面図同様に荒木建築事務所の作成によるものである。この改修図によるエレベーターの設置個所は、平面図に記載されたエレベータ位置と一致している。

加えて、日本エレベーター製造株式会社が作成した「二人載用 人員昇降機」の見積書（大正11年3月16日付け）と、「御注

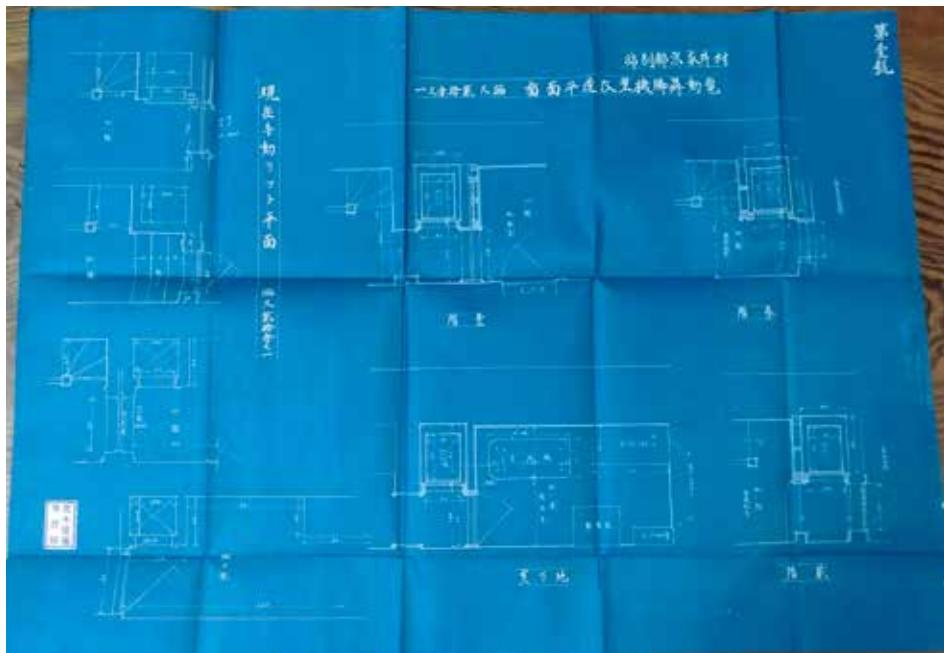


図3 エレベーター平面図

文請書」（同年4月20日付け）が残る。いずれも荒木賢治又は荒木建築事務所宛となつており、荒木がエレベーター設置工事を担当したことが確認される。柏木工務所によるエレベーター設置に際しての電気工事見積書（同11年4月28日付け）も残さ

れている。

このことから、エレベーター設置のため改修図面（4枚）が作成され、同時期に全体平面図（大正期平面図）も荒木建築事務所によって作成されたものと考えられる。昇降機の発注書類からエレベーター設

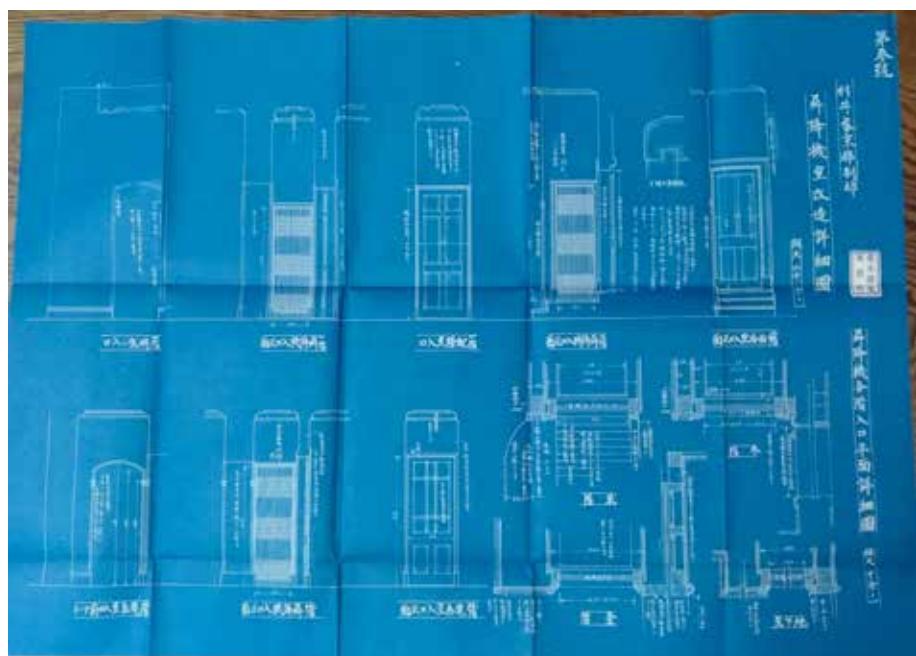


図4 エレベーター入口詳細図

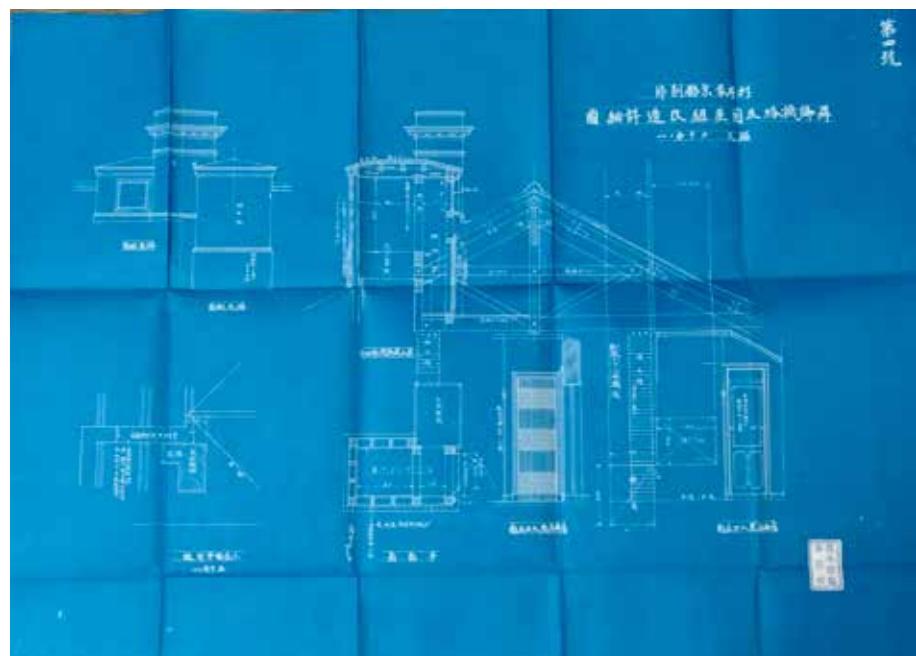


図5 エレベータ断面詳細図

置は大正11年頃になされたことが分かる。この人員用エレベーターは現存しておらず、戦後の改修において配膳用昇降機に改修されている。

以上のような大正11年頃の改修の契機となる事象として、村井の再婚が想定される。大正5年（1916）に創業時から苦楽を共にした宇野子夫人を亡くし、翌6年に日野薰子と再婚している。薰子夫人は公家の家柄である日野家の令嬢であり、宮中にも出仕した。薰子夫人の容色は殊に評判で、亀井至一が描いた絵画の題材ともなっている¹⁹⁾。村井はこの作品と同内容の絵画を購入し、長楽館2階の西寝室に飾っていたことが古写真から確認される（前掲千木良論文参照）。

薰子夫人を迎えるに際し、長楽館においても室や設備を整えた可能性が推測される。エレベーターの設置もまた、そうした生活空間を整えるための装置であると考えられる。加えて、村井吉兵衛は糖尿病を患い、大正10年1月に片足を切断しており²⁰⁾、この点もエレベーターの設置に影響した可能性も考えられる。こうした契機を含め、明治期に建築された迎賓館的施設の設備的なアップグレードが進められたものと考えられる。

■昭和3年以降の改修（村井の死去～現在）

大正15年（1926）、村井吉兵衛が死去する。翌昭和2年（1927）には昭和恐慌の煽りを受けて村井銀行が閉鎖され、長楽館の不動産は昭和銀行の管理下となった。その後、昭和12年（1937）に実業家藤井善助が譲り受け、「藤井斎成会有鄰館第三

館」として美術館施設に用いられた。この際の改修の有無については不詳である²¹⁾。

昭和21年（1946）にはGHQに接収され、同24年頃に解除される。昭和29年（1954）に土手富三氏が不動産を購入し、以降、ホテル長楽館として活用した。ホテルとしての活用に際して、昭和43年（1968）頃に1階温室の内装を改修し、同時期に2階開廊にガラスを入れて室内化する改変が行われたことが確認される。

4 各室の性格とその変遷

本章では資料を基に各室の用途を考察し、その中で変遷が見られる室について指摘する。

各室の用途を知ることのできる資料として、竣工アルバムに付されたキャプション、大正期平面図中の室名記載（各階ごとに示したもののが図6～9）を用いることができる。この他、村井家の作成した「長楽館什器備品台帳」があり、什器が配置された室名が記載されている。同台帳は作成年代が不詳である。主として家具類などを対象にしているため、和室である3階や地下室に関する記載が見られない。台帳に記載された室名は大正期平面図とほぼ一致しており、同時期以降の状況を示し、資産を手放すに際して作成された可能性も高い。前記資料から作成した室名対称表が（表2）である。

各室の内装などの詳細については別稿（前掲千木良論文）に譲り、ここでは長楽館の主要な用途を果たす室について考察する。さらに、空間の性質の変更に関わると

思われる室名変更や内装改修について述べる。

■地中室（地階室）の用途（図6）

地階部分は竣工アルバムにはほぼ掲載さ

れておらず、当初の用途は不明である。大正期平面図では、厨房をはじめとするサービスヤードとしての室用途が配置されていることが分かる。

北西部分に厨房を置き、1階食堂脇の配

表2 室名表

	「竣工写真帖」 (明治期)	「荒木建築事務所図面」 (大正期)	「長楽館什器備品臺帳」
1階	廣間 (Hall)	廣間	広間
	應接室 (Reception Room)	應接室	應接室
	客間 (Drawing Room)	客間	パーラー?
	食堂 (Dining Room)	食堂	食堂
	書斎 (Library)	書斎	書斎
	球戯室 (Billiard Room)	球戯室	玉突室
	温室 (Conservatory)	花卉室	温室
2階	喫煙室 (Smoking Room)	支那室	支那室
	廣間 (Upper Hall)	廣間	広間
	貴婦人室 (Boudoir)	夫人室	夫人室
	東客室 (Guest Room)	東寝室	東寝室
	東南客室 (Guest Room)	南寝室	南寝室
	美術室 (Museum)	北寝室	北寝室
	西南客室 (Guest Room)	西寝室	西寝室
	東浴室 (Bath Room No.1)	浴室	
	西浴室 (Bath Room No.2)	浴室	
	手洗所 (LaVatory)?	化粧室	
	開廊 (The South Veranda)	縁側	
	露臺 (The North Veranda)	露臺	露臺
3階 (~4階)	茶室 (残月の間) (The Ceremony Room)	茶室 (十帖)	
	座敷 (Drawing Room)	中座敷	
		扣室	
	客室 (Guest Room)?	次の間 (十一帖)	
		上段之間 (十一帖)	
		次の間 (十五帖)	
	四階客室 (Guest Room)?	西座敷	
		次の間 (八帖)	
		扣室 (八帖半)	
		化粧室	
地下室	四階浴室 (Bath Room No.3)?	浴室	
		女中和室	
	階下室 (Basement)	—	
		執事室	
		貯蔵室	
		酒蔵室	
		食堂	
		石炭室	
	厨房 (Kitchen)	厨房	

膳室への階段が設けられ、飲食供給の動線が確保されている。東側には貯蔵室、酒蔵室といったストック機能や、石炭室、食堂（使用人用か）等が配される。西側部分にはサービス機能を統括する執事室が置かれている。

■ 1階室の用途（図7）

広間の東側に当たる客間は、ロココ様式を採用し、壁面に洋画家・高木背水による12枚の油彩画が嵌められている。自由の女神（ニューヨーク）、ピラミッド（カイロ）、二重橋（東京）など日本を含む世界の

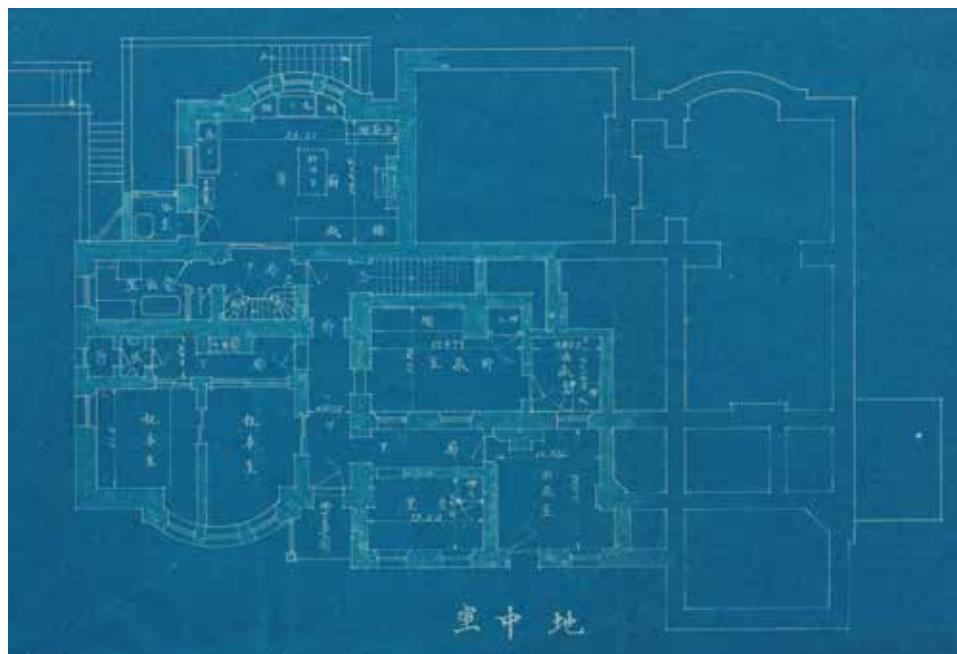


図6 大正期平面図地中室

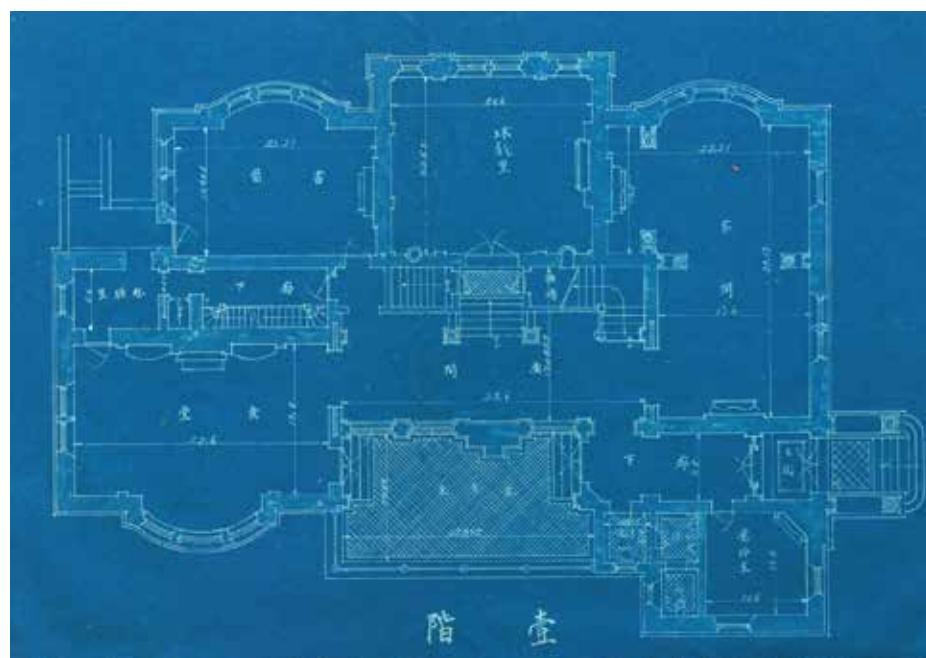


図7 大正期平面図1階

名所画となっている²²⁾。客間の部屋名称は、竣工アルバムでは「客間 (Drawing Room)」とされ、大正期図面でも「客間」と記載される。明治42年（1909）刊行の雑誌『グラヒック』では「The parlour (大談話室)、什器台帳でも「パーラー」と呼ばれている²³⁾。このため軽い飲食を伴う休憩・談話を目的とした用途の室であると考えられる。

広間の西側には、ネオ・バロック様式を基調とする食堂が配されている。竣工アルバム、大正期図面ともに「食堂」と呼ばれており、現在も食事空間が踏襲されている。

一般的に上流階級の間で行われたヨーロッパ風の接客形式としては、食堂における会食の後、ドローイングルーム（客間）へ移動して休憩や談話をすることがあげられる。長楽館においても客間と食堂は接客・迎賓機能の主要な2室と考えられ、広間を中心に東西の軸線で両室を結び、両室のみ引き込み式扉を採用して幅広い開口部を設けている。加えて花卉室（温室）や、球戯室などの男性客向けの娯楽機能が配される。

一方、玄関脇には「應接室」と記載される室が見られる。マントルピースにはアルヌーヴォー風の意匠、窓の戸袋にはセッション風の装飾が見られる。玄関に最も近く、1階では最も小さな室であるため、来賓の侍従者の待機や、事務的な接客に供されたことが推測される。

■ 2階室の用途（図8）

1階広間から2階への途中に「支那室」

が設けられている。球戯室（1階）と同様に支那室は男性客用の重要な娯楽機能を果たすものと考えられる。竣工アルバムでは「喫煙室」と記されるが、前述したように大正6年頃に龍の天井画が描かれるなどの内装改修が施され、室名が変更されている。内装に中国風の要素が強くなったことを示している。

2階広間の東側には夫人室、寝室2室が設けられている。夫人室は竣工アルバムでは「貴婦人室」、大正期図面以降「夫人室」と記載される。「夫人」が村井吉兵衛夫人を指すのか否かは特定できないが、女性用の空間であったことが分かる。

西側には寝室2室が配される。このうち北寄りの「北寝室」は竣工アルバムでは「美術室」と称しており、内部に陳列ケースが配置されている。大正期において寝室の増加が必要となり、用途が変更されたことが推測される。

この他、寝室に附属する浴室や化粧室が設けられており、2階は宿泊機能を想定し、大正期以降さらにその機能が強化されたと言える。

■ 3階室の用途（図9）

前述したように3階は一段低い位置の「茶室」の他、床レベルの差によって西側、中央、東側の3つの和室空間のエリアに分けられる。大正3年時の3階増築改修を経たため、竣工アルバム中には室の特定が難しい写真もある。竣工アルバムから、茶室や中座敷は当初から接客空間として重要であったと推測される。

大正2年の改修により、東側エリアに

豪壮な書院造の空間（上段の間、次の間）が増築され、和風接客空間としての役割がさらに強化されたと言えよう。3階という奥まった位置に配するという点で、より強い親密さを示す接客空間であったことも推測される。

5まとめ

本稿では長楽館の建築的要素や改修履歴の検証によって、その迎賓施設としての性格を考察した。

長楽館の空間の使い分けとして、地階は飲食提供をはじめとするサービスヤード機

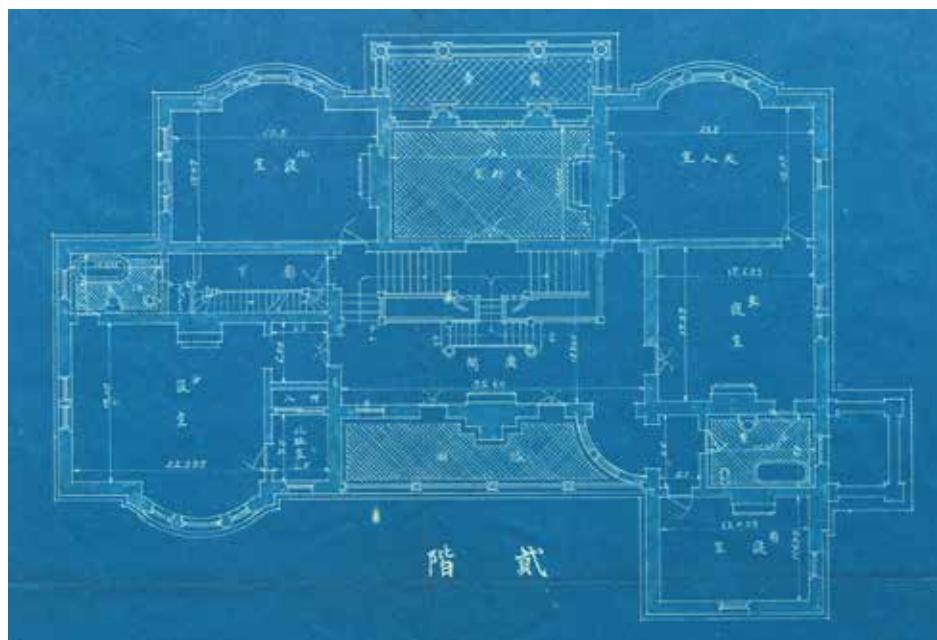


図8 大正期平面図2階

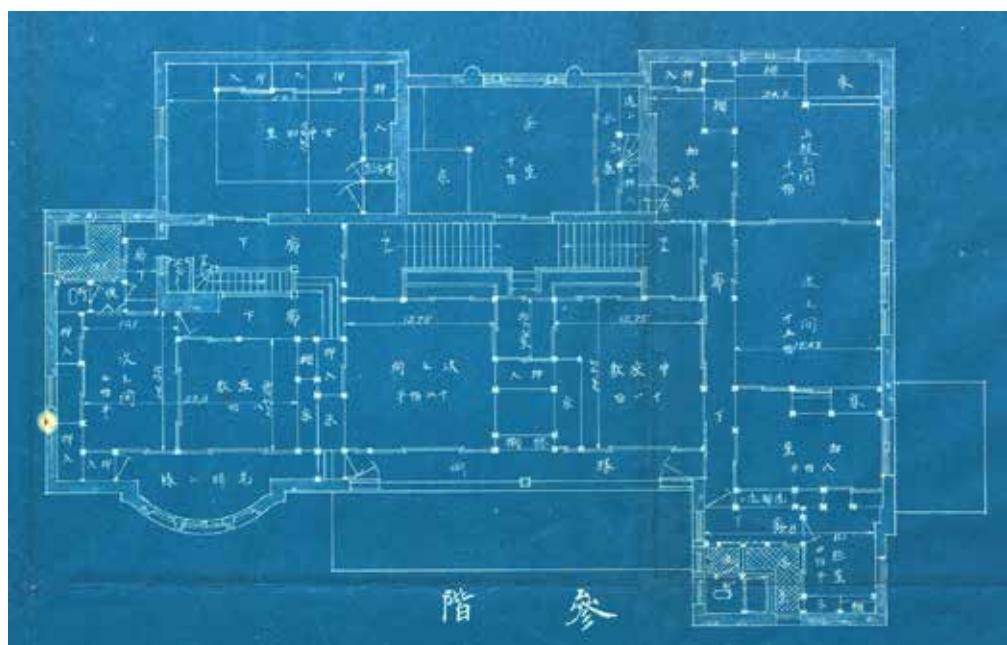


図9 大正期平面図3階

能を有した。1階では、会食・談話等の主要な接客機能が意図されている。食堂による会食、客間における談話を主たる機能として、その周囲には花卉室(温室)の鑑賞、球戯室や支那室(喫煙室)における男性向け娯楽機能が配置されている。2階は主に宿泊機能を果たした。3階は茶室や座敷による和式の接客機能を意図したと考えられる。

これらの接客空間には西洋の古典主義系の諸様式の他、支那室(喫煙室)では中国風を、和室では豪壮な書院造や数寄屋を用いた意匠など、用途に合わせた使い分けを意図したと言える。こうした用途に応じて、重要な室では天井高を高くするなどの工夫が見られる。殊に大きな段差を伴う中2階、中3階の空間を設けることで、劇的な空間の演出が図られていることも興味深い。用途に応じた空間を配置するため、床レベルや天井高の操作を行う複雑な設計手法は特筆すべき点であろう。一方、室によって窓框の高さを変えることで外観に現れる開口部の配置を整えており、より外観を重視していることが分かる。

次に、接客・迎賓機能を強化するために、各時期に改修がなされたことが確認される。大正3年には、大正御大典(大正4年)での迎賓機能に対応するため、3階に本格的な書院造の空間が設けられた。和風空間の質的向上によって、海外からの賓客への迎賓機能も強化されたと考えられる。

これには屋根形状を変更する大掛かりな改修を必要とした。

大正6年(1917)頃には支那室(旧喫煙室)の内装が改修され、より中国風が濃厚な意匠へ変更されている。大正11年(1922)頃には、エレベーターが設置され、設備の近代化によるユーティリティーの向上が図られている。さらに時期の詳細は不明だが、大正11年頃までに、2階の美術室が寝室へと変更され、宿泊機能が強化された。このように、意匠的には和風、中国風への傾斜を伴いつつ、設備の近代化を含めた接客・迎賓機能が強化されている。

村井が京都における迎賓館を意図したと伝わるように、長楽館は明治末期に建築された邸宅建築として極めて充実した迎賓機能を有する事例と考えられる。意匠の上質さに加えて、空間のプランニングにおいても迎賓機能が強く意図されていたことが分かる。建築後も幾度かの改修によって迎賓機能を向上させていったことが確認され、その重要性が改めて評価されよう。

謝辞

所蔵資料をご提供頂いた内海愛子様、川田恭子様、現地調査にご協力頂いた株式会社長楽館、様々なご指導を頂いた石田潤一郎先生には、紙面を借りて深く御礼申し上げます。

いしかわ ゆういち
石川 祐一 (文化財保護課 主任 (建造物担当))

註

- 1) 村井吉兵衛の業績に関する主な参考文献としては、大溪元千代『たばこ王村井吉兵衛 たばこ民営の実態』(世界文庫、1964年)、『明治のたばこ王 村井吉兵衛』(たばこと塩の博物館、2020年)などがあげられる。
- 2) 「長楽館指定調査報告」(京都大学建築学科歴史研究室、1986年)
- 3) 所蔵者の内海愛子氏(恵泉女学院大学名誉教授)は村井吉兵衛の義理の孫に当たる村井資長氏(元早稲田大学総長)の子息・村井吉敬の夫人である。同資料は前田尚武氏(京都市京セラ美術館)が所在調査を行い、その一部は同美術館で開催された「モダン建築の京都」展に出展されている。
- 4) 帝国ホテル衣糧部主任であった牧口銀司郎が後に、以下のエピソードを記している。帝国ホテル本館を建設する際に、フランク・ロイド・ライトから黄色のすだれ煉瓦の調達を要望されていた際の会合において、重役であった村井吉兵衛が京都別邸において黄色い煉瓦が使われていることを述べ、後日、愛知県西浦町(現常滑市)の久田吉之助が納入したものであることを報告したという(『帝国ホテルのスダレ煉瓦』)。以上の文献の所在などについて、INAXライブミュージアムの後藤泰男氏からご指摘頂いた。
- 5) 旧土地台帳(下京区四条大和大路東入祇園町南側、圓山町)による。
- 6) 前掲2
- 7) 夏目漱石『夏目漱石全集第十三巻 日記及び断片』p.226(岩波書店、1966年)
- 8) 松波秀子「宣教師・教育者・建築家として J. M c D. ガーディナー」『住宅建築』256号(建築資料研究社、1996年7月) pp.152-156等を参照した。
- 9) 合資会社清水組京都支店「工事経歴書」(清水建設所蔵資料、年代不詳)
- 10) 熊川千代喜『藤井善助伝 続編』(1939年) p.112
- 11) 前掲10 p.104
- 12) 前掲2
- 13) 「村井氏別荘長楽館の改造」『建築工藝叢書』(建築工藝協会、1915年) p.40
- 14) 前掲9
- 15) 赤堀又次郎「建築家大島溢株翁」『讀史隨筆』(中西書房1928年) pp.317-325などを参照
- 16) 『大正大禮京都府記事 庶務之部上』(1917年) p.368、pp.370-371
- 17) 長尾一平『岳陽長尾健吉』(1936年)
- 18) 松波秀子「ガーディナー建築事務所のスタッフ、荒木賢治と上林敬吉について」日本聖公会の建築史的研究4『日本建築学会大会学術講演梗概集』(1955年) p.99
- 19) 小野忠重『江戸の洋画家』(三彩社、1968年) p.172
- 20) 村井薰子「一七 感謝の思ひ出」大谷彬亮『医者大谷周庵』(1935年) pp.50-56
- 21) 前掲10 pp.104-116
- 22) 「東京・皇居二重橋」「北京又は瀋陽の天壇」「ニューヨーク・自由の女神」「ミャンマーのバゴダ」「エジプト・カイロのピラミッド」「イスラム・ローザンヌ湖」「英國・ケンブリッジ風景」「フランス・ベルサイユ宮殿」「モスクワ・クレムリン風景」「ドイツ・サンクルン宮殿」「山岳風景(アルプス?)」が描かれている。洋画家・高木背水の制作による。高木が同画を手掛けた経緯については、直木祐次良『高木背水傳』(大肥前社、1937年)を参照した。
- 23) 『グラヒック』第1巻第14号(有楽社、1909年8月) pp.14-15